

景気マインドをさらに明るくしてくれたスポーツ選手

東洋学園大学現代経営学部 助教授 木村 壮次

景気は順調に拡大し、企業収益は好調に推移している。設備投資は“花形”のIT産業だけでなく、“過去の産業”と蔑まされていた鉄鋼などの伝統産業も復活している。個人消費もゴールデン・ウィークの海外旅行が東南アジアや中国向けを中心に急回復するなど、所得の増加を反映し堅調である。業績改善のほか、好調なマンション販売等から地価は東京、大阪、名古屋の3大都市圏の商業地で上昇に転じている。また、企業の人手不足感は急速に高まっており、新卒への求人も増加している。この景気をマインド面から一層明るくしてくれたのがスポーツ選手である。

長い間日本は“失われた10年”とか企業の不祥事が頻発し気分を暗くさせるニュースが撒き散らされ、景気マインドを必要以上に萎縮させていた。英語ではうつ病も不景気も“depression”と言い、日本では景気には“気”という言葉を使うように、経済と気分は密接に結びついている。

今年、その気分をパッと明るくさせてくれた最初の出来事は、トリノ冬季オリンピックで大活躍した荒川静香選手であった。卑劣な審判員等によって、得点の対象外とされてしまった華麗な“イナバウア”を敢えて披露しながら、フィギュア・スケートでアジア初の金メダルを獲得し、世界に“ニッポン、大和撫子”を強くアピールしてくれた。この“クールビューティ荒川”の金メダルへの道は、血のにじむような“汗と努力”の結果であったことを後で知った。

これに続いたのが“野球”である。初めて行われた国別対抗戦「ワールド・ベースボール・クラシック(WBC)」で“王ジャパン”は、アテネ五輪優勝の強豪キューバを破り世界一の座を獲得した。桜がほころび始めたこの日の日本人は心が一つになっていた。

“イチロー”の活躍は素晴らしかった。優勝当日は、カミサンや娘から「お父さんが見ていると負けるから外に行って」と嫌味をいわれ、楽しみを犠牲にして家族の意見に従った。家に戻ると、「まだ早い!」と叫ぶ。9回、得点は6対5で1

点差に追いつかれていたが、イチローの駄目押しヒットで歓喜の万歳。

普段はクールに徹していたイチローは、WBC戦を通じて「日の丸を背負う重みを感じて戦いたい」といい続け、これがあの“イチロー?”という程の激しい言葉と感情を顕わにして戦い、優勝の後、最大級の喜びを見せてくれた。このほか松坂、上原等も大活躍し、その後の国内の野球人気を大いに盛り上げてくれた。

世界一となった日本に対して、アメリカのメディアは「日本は大きな本塁打を打てないし、すごい速球も投げられない。しかし、米国人が忘れてしまった野球をしている。アメリカは日本の野球から学ぶべきものがある」と日本の安打や犠牲打、盗塁をからめて確実に1点を取りに行く「スモール野球」を称賛していた。

こうした“日本的な行動”は野球だけではなく、企業経営についても同じである。アメリカの企業経営はM&Aを駆使するなど、どちらかと言えば“汗水流して努力する”というより個人主義、短期主義である。“成果主義、株価重視”はその一環である。他方、本来の日本は中長期的主義であった。協力重視、終身雇用などいわゆる日本的経営である。

近年、政府やマスコミによって、グローバル化、構造改革の名の下にアメリカ型経営がもてはやされたのは周知の通りである。これによって、若者の間には“ホリエモン”に代表されるように、「汗をかいてカネを稼ぐなんて馬鹿馬鹿しい。カネがすべて」という風潮が強まっていた。若者だけでなく、経営者も金儲けに狂い、“安全性の軽視”など本来なすべきモラルを喪失していた。

イチロー、静香のように、汗水流しても日本人としての“志のある挑戦”をする人と、ホリエモンのように“カネがすべて”というアメリカ型ないし無国籍型人間。経済発展はいろいろな日本人を生んでいくが、海外でも大活躍するスポーツ選手は、日本が大好きのような。次はサッカーWCだ、頑張れ日本!